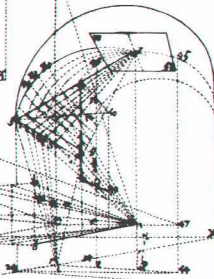
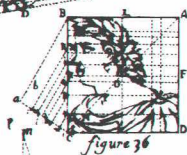
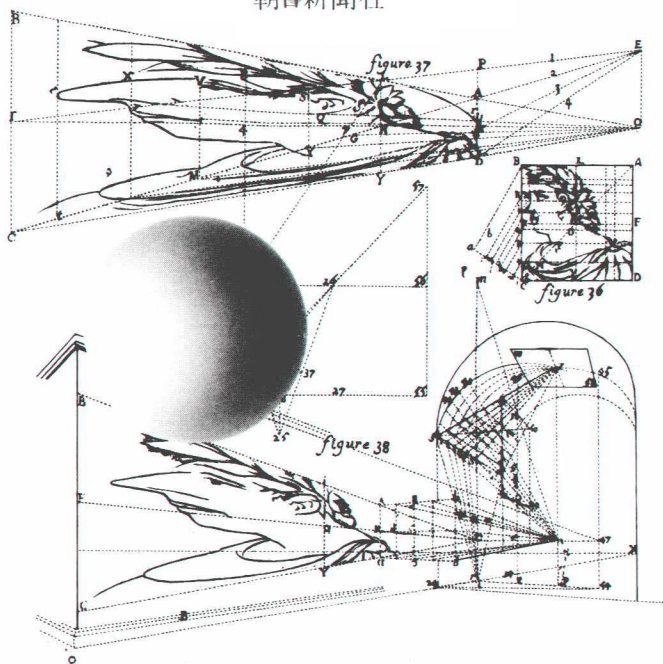


昨日の花

結城昌治

朝日新聞社



昨日の花

第一刷発行——一九七八年十月三十日

定価——九八〇円

著者——結城昌治

装幀——中島かほる

発行者——藤田雄三

印刷所——図書印刷株式会社

発行所——朝日新聞社 東京 大阪 名古屋 北九州

© Shoji Yuki 1978 0095-234607-0041

目次

I 場末育ち

落第虫 10

場末育ち 13

食わざるの記 16

つまらぬ酒 20

われ快尿あるのみ 23

わたしの体力測定 26

すべて寿命、持病は身内

私の顔 34
29

私のケチな部分 36

暇・遊び・仕事 39

初心懸命 42

麻雀発心のこと 45

ひとり旅 48

仕事始め 51

楯目の幻想 54

色紙無心状 56

詐欺にかかった話 59

II 推理小説雑感

一視点一人称 64

チャンドラー私見 68

私の好きなベスト5 73

E・S・ガードナー逝く 77

推理小説の独創性 80

「わらの女」について 83

推理小説と人間蒸発 94

推理小説の行方 97

「事件」と推理作家協会賞 101

コンテスト受賞の頃 104

私の発想法 109

無理難題 112

時代小説と記憶力 115

推理小説について（対談） VS 生島治郎氏

Ⅲ 病縁機縁

病縁機縁（福永武彦さんのこと） 150

調教師と駄馬の関係（福永武彦さんのこと） 152

やさしさときびしさ（大岡昇平さんのこと） 154

格即是風（吉行淳之介さんのこと） 158

好敵手（殖谷雄高さんのこと） 160

フロフタ（秋山庄太郎さんと生島治郎さん） 163

飲み友達（佐野洋さんのこと） 165

燃焼する女・長嶺ヤス子 167

梶山季之氏を悼む 170

波郷さんと私 172

療養所時代の石田波郷 176

「くちなし句会」の記 182

Ⅳ 失った原点

英霊もしくは死せる虫たち 186

失った原点 201

生きている軍刑法と国家の道義 204

『敵前逃亡』 裁判の結末 208

無気味な日本人 220

おとな一錠こども半錠 223

旅先の憂鬱 227

「やかん」 231

V 志ん生の人と芸

志ん生の演目帳 236

志ん生の人と芸 244

女性と落語 250

寄席と小説雑誌 252

あとがき 257

昨日の花

I 場末育ち

落第虫

人は生まれながらにさまざまな虫を飼っているらしい。運不運とか性格とかいうのも虫のせいのように、趣味嗜好の類も虫のせいではないかと思う。

怠け虫、欲張り虫、けち虫、意地悪虫、おべっか虫、出世欲虫、こう並べるとろくな虫がいないうだが、親切虫、正直虫、孝行虫なんてのもいるにちがいない。転居ばかりしているのは転居虫がいるのである。「おれは賭事は嫌いだ。性に合わない」という人がいるけれど、その人には賭事の好きな虫がいらないか、あるいは賭事の嫌いな虫がいるのだろう。「おれは麻雀をやりたいが、ぼろぼろ死ねたら本望だ」と言っていて、そのとおり脳出血で死んでしまった人もいるが、その人には麻雀狂の虫が棲息していたのだ。虫が好かないとか虫が知らせるとか、虫の居所がわるいなどという言葉がむかしからあるし、浮気の虫などはごくお馴染みさんである。いい虫とわるい虫がいるように、同じ虫でも強い虫と弱い虫もいるわけで、並以上に浮気の虫が強いと好色と呼ばれ、その強さが極端になると色気ちがいにされてしまう。

ところで、私に巣くっている虫たちの中で並以上と自負できるのは落第虫である。この虫は小

学校から中学へすすむ際、にわかに頭角をあらわした。三校か四校受験して、みんな滑ったのだ。滑り止めのつもりで受けた学校まで滑ってしまった。このときは自分の非運を嘆くより、熱心に教えてくれた家庭教師や両親の顔を見るのが辛かったことを憶えている。高校進学に失敗した中学生を中学浪人というそうだが、私の場合は小学浪人である。当時の小学校には二年制の高等科というのがあったけれど、私はのらくらしながら翌年を待ち、いちばんやさしそうな中学を受けてようやく進学した。

落第虫の活躍はこのとき以来である。いつの間に棲みついたのか知らないが、よほど棲み心地がいいらしい。何をやっても大抵一度は落ちる。人生を左右するようなことでなければいくら落ちても差支えないが、中学から大学の専門部へ進学するときも落第虫のやつは遺憾なく実力を発揮した。やはり三校か四校志望して全部落ちてしまった。競争率ほとんどゼロの学校にも入れなかった。みんなが合格するのに、私だけ試験も受けさせてくれなかったのである。あとで分ったが、素行不良という理由で内申書の段階で振落とされたのだからどう仕様もないけれど、時はまさに太平洋戦争の敗色濃厚な昭和二十年三月だった。すでにサイパンが陥ち、グアム島の日本軍も潰滅、内地の主要な都市はB29の無差別爆撃下にあった。その頃の中学生は勤労動員のため軍需工場で働かされて、私たちの同学年は港区天現寺の安立電気という会社で働いていた。この会社は今でも健在のようで天現寺を通るたびになつかしくなるが、それはともかくとして話を戻すと、進学しない者は動員学徒という身分を失ってそのまま一般の工員として勤務することになっていた。徴用工と同じだから逃げるわけにはいかない。そして、素行のよろしくない工員は九州

の炭鉱へ送り込まれる仕組みだった。

こうなったら覚悟を決める以外にない。というより、多少グレていたといっても当時は私も軍国少年の気風に染まっていた。神州不滅を信じ、天皇のため祖国のため同胞のために命を捨てて悔いがないという心意気があった。悠久の大義に生きるなんてことを真剣に考えていたのだ。それで両親にも無断で、海軍特別幹部練習生というのに志願をした。ところが、試験に合格し、歓呼の声に送られて東京駅から出発、武山海兵団に入団したあたりまでは人並だったが、たった一週間で帰されてしまった。身体検査の再検査の結果だった。またしても落第虫の仕業にちがいないが、入団してからつくづく軍隊が厭になっていたので、このときは心の底から落第虫に感謝をした。

しかし、落第虫がありがたかったのはこのとき限りで、空襲にも二度やられたし、結核の手術も一度で済むはずのところを二度やられ、去年は二十余年ぶりに再発して入院する羽目になった。肺病も落第である。

文学賞のほうも落第虫のせいかどうか、推理作家協会賞をもらったのは五回目の候補作で、直木賞も三回目だった。車の運転免許も右にならえて仮免合格が五回目、本免は三回目に辛うじて合格した。まったくの話、私はこれからも落第つづきだろうと観念しているが、おかげであくせくしない処世を知ったと思っている。落第虫を恨んではない。

（別冊文芸春秋・一九七五年夏季号）

追記 私志願した海軍特別幹部練習生というのは、通称「特幹練」といって、間もなく終戦になったから、このときが最初で最後の志願兵制度だった。私は帰郷命令で帰された晩、空襲で家を焼かれ、炎のなかを逃げまわった。

場末育ち

東京で生まれ育った人を大ざっぱに下町っ子、山の手っ子という分け方が定着しているようだが、大正以後は場末っ子ともいうべき人びとがかなりの比率を占めているはずである。東京の人口がどんどんふくれて郊外に伸び、それに伴って交通機関が発達すると、山手線沿いの町が都会らしい顔立ちをととのえてきた。今では繁華になりすぎて新宿や池袋、渋谷を場末とは呼びにくくなったが、いずれにせよ場末っ子とか場末育ちという呼び方を耳にしないのは語感のわるさにも原因があるかもしれない。

ところで、私は品川区の戸越^{とごし}で生まれ、戦災で家を焼かれるまでそのごみごみした貧しい人の多い町で育った。国電の最寄りの駅は大崎か五反田、私鉄なら東急池上線の戸越銀座である。私はその戸越銀座の米屋の伴だけれど、戸越銀座という俗称がいみじくも示しているように、おそらく典型的な東京の場末町だろう。第一次世界大戦あたりから京浜工業地帯の発展にしたがって人家が密集した町である。あまり粹な町とは言えない。もちろん閑静な住宅地とも言えない。

ところが、最近私は仕事の関係で下町育ちのご老人の話を伺う機会が多く、そのたびに言葉遣

いに注意しているが、訛りやアクセントなどが私とほとんど違わないのに気がついた。

たとえば、

「寒い」が「さぶい」、「煙い」が「けぶい」だ。

「紐」が「しほ」で、「いぼ」が「えぼ」になる。

「昨夕」が「ゆんべ」で、「昨日」を「きんのう」なんて発音する。

このほか「しっぱたく」とか「ふんづかまる」とか、いちいち例を挙げていったらきりがない。「風邪えひいた」とか「腹あへった」とかいう言い方も同じだ。よく聞いてみると下町の職人言葉で、それなら場末育ちに相通じるわけも分るような気がした。私が子供の頃は工具を職工といったが、その職工ももとは職人の出が大部分で、職工の需要につれて下町の職人が場末に移ってきたのではないだろうか。そう思えば、私が育ったあたりは下町の職人階級がそっくり移住したようなもので、その子供たちが下町っ子と同じ言葉をつかうようになっても当たり前なのだ。少しも不思議はない。メンコやベーゴマの遊びまで変らなかつた。

しかし、どうもよく分らないのは「い」と「え」「う」の訛りで、それは北関東か越後の訛りと聞かされ、私は両親の生まれが栃木なのでそのせいかと思っていたが、東京の下町訛りもやはり同じだった。「威張る」を「えばる」、「動く」を「いごく」、「お前さん」を「おまいさん」なんて言う。まあ東京といっても江戸のむかしを辿れば田舎者の寄せ集めだから、地方地方の言いまわしや訛りがごちゃごちゃになって江戸弁から東京弁につながってきたのだろうけれど、小説を書く立場になるとそれも言っていられないから厄介である。